

週2回の2外中国語の教学モデルについて

郭 春貴・郭 久美子

(受付 2010年11月1日)

0.

日本の大学における第2外国語の中国語授業（以下「2外中国語」と称する）はほとんど週2回4単位という選択必修の形態を取っており¹、効果的な授業であるかどうかこの週2回の授業をどのように組み立てるかに深く関係があるのではないかと思われる。

これまで週2回の2外中国語の教学効果は一体どのようなものだったのだろうか？何か問題はないだろうか。あるとすれば、どのように解決すればいいだろうか。どのように週2回の授業の特長を伸ばして、2外中国語の教育の質を高めていけばよのだろうか？

本論文は広島修道大学の16年間の経験を踏まえて、第2外国語習得の理論に基づき、日本の大学の週2回の2外中国語の授業について論じ、新しい授業モデルを模索したい。

1. 週2回の2外中国語の状況

2外中国語は一般教育カリキュラムの外国語授業であり、英語と同じく、他の教養科目と比べると、1コマ当たりの単位が半分しかない。週2回で一年間の授業（年60回授業²）でもわずか4単位に過ぎない。そして、ほとんどの大学で2外授業は1年生に開講している。

郭春貴（2005）でも述べたように、日本の大学は、研究重視、教育軽視という教育環境にあり、さらに専任教員の不足、カリキュラムのたびたびの変更、学生の学習意識の低さなどの要因も加わり、各大学の2外中国語の授業形態は主に以下のようにになっている。

1.1 2人の教員に1コマずつ完全に任せるタイプ

郭春貴（2005）に述べたように、大学は2外授業をあまり重視せず、専任教員の数も十分とは言えないため、2外中国語の授業は他の第2外国語授業と同じく、非常勤に任せること

1. 郭春貴が全国70の大学を調査したところ、52校で2外中国語は週2回の授業であった。一部の大学は学部によって、週1回の授業もある。本論文は1学部でも週2回あれば、その大学の授業を週2回とする。
2. 2009年、文科省が各大学に1学期16回の授業を要求してきた。2010年より、1学期16コマの授業をする大学が増えたが、試験日を差し引くと、実際の授業は年間60コマである。

が多い。非常勤教員の多くは何校も掛け持ち、学生に対する細かい教育を期待することはできない。教員同士の連絡も難しいので、授業は別々に行うことが多い。教材も別々のため、学生は2冊のテキストを買わねばならず、無駄な出費をさせることになる。異なる教員とテキストであることにより、教学内容が重複し、説明の違いが生じることもある。これは、時間の無駄だけではなく、学生を混乱させることにもなり、教育効果が非常に低いと言わざるを得ない。

1.2 授業内容は決まっているが、授業自体は任せるタイプ

1.1のような問題点を避けるために、専任が授業内容を決め、連絡しなくてもいいように2人の教員が別々の内容で、別々のテキストを使って授業を行うというものである。主にネイティブの教員が会話と聞き取りを、日本人の教員が文法と読解を担当する。この形式は一見重複しないように思われるが、実際2外中国語は入門から初級の授業なので、どうしても内容が重複してしまうことが多い。連絡しなくてもよいという利点はあるが、結局、テキストが違うため、1.1に述べた重複と不統一という問題点は、依然として解決されないことが多い。

1.3 1人の教員に任せるタイプ

1人の教員に2つの授業を任せるのは連絡する必要がなく、テキストも統一できるので、時間とお金の節約になるだけでなく、授業もやりやすくなる。しかし、時間割と非常勤教員の都合により、週2回の授業を同じ教員が担当するのは、ほとんどの大学で困難である³。たとえ同じ教員が担当できても、この授業形態では、1人の教員が2つの授業を担当することになり、教員の力量と自覚が要求される。連絡する必要がないので、自分の意のままに、雑談の授業に陥る可能性もある。また、学生がもしその教員とそりが合わなければ、授業が2つともだめになる可能性もある。このような授業は自覚が高い教員なら問題がないが、自覚が低い教員では、教育効果があまり望めない。

1.4 2人の教員で統一教材を使うリレー形式の授業

授業内容の重複、時間とテキストの無駄を避けるために、多くの大学は教材を統一し、2人の教員によるリレー形式の授業形態を採用するようになっている⁴。2人の教員が同じ教材を使い、発音、文法、会話、文化などをすべて教え、互いにメールやノートなどで授業の進行状況を連絡し合う。この形式の授業では学生が2人の教員の良さを吸収できる。また、教

3. ほとんどの大学は週2回の授業が別の日に行われるので、週2回担当できる非常勤の教員を確保するのは難しいというのが現状である。

4. 関西学院大学、東海大学、京都女子大学、日本大学、島根県立大学、龍谷大学、下関市立大学などがテキストを統一している。

員が互いに連絡しなければならず、自由気儘にはできないので、授業の質がある程度保障できるのではないと思われる。しかし、この形式も全く問題がないとは言えない。まず、2人の教員がリレー形式で同一の教材で、発音、文法、会話などを全部教えるので、テキストに追われて、教学の重点が見えにくくなり、復習が多くなる傾向がある。そして結局どれも中途半端になる。特にテキストに追われると、テキストのポイントや文法などを一生懸命に教えて、発音や会話の訓練が疎かになる傾向がある。

以上が週2回の2外中国語の主な形式であるが、いずれも一長一短と言わざるを得ない。どのタイプの形式を取るかは、各大学の教育方針、教育目的と教育環境（教員、カリキュラム、時間割、学生レベル）によるものと思われる。以下、郭春貴の勤務校である広島修道大学（以下修大と略称する）の実例を述べたい。

2. 広島修道大学の実例

2.1 歴史と現状

修大は2外を初修外国語と称する。履修単位は1994まで各学部の卒業単位は全て4単位だったが、1995から各学部の履修単位は以下のように変わった⁵。

(数字は単位数)

	商学部	人文学部	法学部	経済科学部 (1997設置)	環境 (2002設置)
1995～1996	4	4	2外で8		
1997～2001	4	4	2外で8	4	
2002～2006	2外で10	英語学科：4 その他：英語4 を含む8	2外で8	4	2外で8
2007～2010	1	英語学科4, その他：0	1	2	0

授業の形態は1994年までは、1.1に述べたような二人の教員に1コマずつ任せ、別々の教材で別々の授業形態を取っていた。1995年から1998年まで、4単位を週1回の授業で2年に分けるという履修形態に変わった。この授業形態は連携授業をしなくてもよいという良さがあったが、入門の初修外国語なので、週1回1年では授業内容が少なく、興味を持たせるこ

5. 広島修道大学教務部の資料による。2011年から2014年の新カリキュラムの初修外国語の卒業単位は人文学部の英文学科は4、心理と社会は2、商学部は4、法学部と経済科学部は2、環境学部は全くの自由選択で0単位である。

ともできなかった。また、1年終了後に長いブランクがあり、その間に学生はほとんど忘れてしまい、2年生の前期の授業は復習が多くなった。また、各クラスの進度が教員によってかなり差が出た。このような経緯があり、1999年に、1.4に述べた1年週2回の、2人の教員によるリレー形式の授業が復活し、2009年まで行われた。

修大の2外中国語の専任教員は1998年以前は1人であったが、1998年から2名（11コマを担当）となった。非常勤教員は2010年現在10名で31コマを担当している。（中国人7名、日本人3名。内4コマ担当の教員が6名、3コマ担当が2名、その他2コマ担当）。週2回の授業から考えると、中国人教員と日本人教員のバランスは決してよいとは言えない。

2.2 2人の教員によるリレー形式授業の成果

修大のリレー形式は非常勤教員の協力を得て、専任がコーディネーターとして、全学の授業をまとめている。この何年間か授業の成果が上がったことを実感している。1998年から、共通教材を使い、2004年から、試験も共通形式で行っている。年3、4回前後期の開始と終了時に、授業の進め方の研究や反省の会合を持ち、各教員が教学の経験や意見を出し合う。また、互いの授業を見学し、授業の質の向上を目指す。学生からも高い評価を得ている。毎年自主的に検定試験を受ける学生が多く、また、卒業単位と関係なくとも、続けて履修する学生が少なくないことも学生の修大の中国語授業に対する評価の現われと考えられる⁶。

同一の教材を使っているので、授業内容も多くなり、4月から習い始め、11月に検定試験4級を受けて、合格する学生もいる。それから、共通の教材なので、全学の学生が学部を超えて互いに勉強ができる。テキストの内容や中国語授業について共通の話題もでき、キャンパス生活が面白いと感じる学生もいるようである。1年終了後の到達レベルも大体同じである。それから、2人の教員の教え方に触れることができ、学生は違う角度から外国語の学習する方法を学べ、興味を高め、視野を広めることが出来る。

2.3 リレー形式授業の問題点

修大では10年間2人のリレー形式の授業を行い、毎学期反省会を開き、問題点を検討しながら、授業の改善に努めてきた。以下は私たちが検討した問題点である。

2.3.1 復習が多い

リレー形式の授業では、毎回必ず前回は習ったものの復習をする。しかし復習というより、

6. 2008年度の1年生の中国語の履修生は総数578人で、2009年中級中国語は3クラスで68名、約12%にあたる。2009年の1年の中国語履修生は総数503人で、2010年の2年生以上の中級中国語の3クラスの履修生は91名で約18%であった。卒業単位と関係なく、多くの学生が続けて履修するということは、授業に対する一定の評価だと考えられる。

もう一度最初から説明することが多い。勉強しない学生や復習しない学生が「わからない」と言ったら、教員はどうしても最初から説明する傾向がある。勉強した学生や復習してきた学生にとっては退屈になる。

2.3.2 教員数のバランスがよくない

2人の教員による1クラスの担当で理想的なのは、中国人と日本人のペアで担当することである。ネイティブの中国人教員が発音の訓練と会話の練習を、日本人教員が文法や文化などの説明を担当すれば、授業内容のバランスがよくなるのではないか。しかし、現実には、中国人と日本人の非常勤教員を同数確保するのが難しく、全てのクラスで日本人と中国人の教員が担当するのは困難である。このアンバランスな状況によって、リレー授業のよさが発揮できず、クラスの差も出てくるものと思われる。

2.3.3 授業の重点がない

リレー形式の授業では、教員は2人ともテキストに沿って、発音、会話、語彙、文法ポイント、文化、練習問題などをすべて教えなければならないので、授業における重点がなく、いつも次から次へと追われるようで、それぞれの教員の特長を発揮できない。しかも2外にとって大変重要である発音がしっかりと教えられない。

3. 新しい授業モデルと第2言語習得の理論

2.3で述べた今までのリレー形式の授業の問題点を反省しながら、新しいモデルを作るにあたり、Gass (1997) の第2言語習得の認知プロセス：インプットの気づき、理解、内在化、統合は、日本の2外中国語教育においても、十分に参考になるとと思われる。

3.1 インプットの気づき

学習者にどのように気づかせるか、つまり注意を向けさせるかはとても大切である。なぜならば、学習者全員が中国語に興味があって履修したのではなく、中国語については、よくわからないが、単位が必要であり、単位が取りやすいと考えて履修する学生がほとんどであるからである⁷。このような学生に興味を持たせるために、インプットを重視する指導法が非常に重要になってくる。第2言語を習得する過程においては、いうまでもなく、その言語に大量に触れることが欠かせない。週2回の授業でもできる限り学生に大量の中国語に触れさ

7. 郭春貴・劉国彬 2007 「中国語学習を経た日本人大学生の中国に対する意識変化」『広島修大論集人文編』48巻(1)

せるのが望ましい。限られた授業時間内に、教員はなるべく、中国語で授業や簡単な質問をし、さらにテキストを音読するなどを通して、インプットする中国語の量を可能な限り増やすことが肝要であると思われる。

3.2 理 解

インプットの気づきと同時に、学生に中国語を理解させなければならない。それは中国語の発音、語彙、会話、文法だと思われる。2 外の学習時間は僅か 1 年 60 コマ（週 1 回の授業は 30 回）に過ぎないので、発音はともかく、語彙、会話、文法をどのぐらい学習させれば、学生は理解できるのだろうか。多すぎても、結局どれも中途半端で、学生には何も残らない。残念ながら現状の 2 外中国語はこのような状況が多いと思われる⁸。したがって、新しい 2 外中国語教育の理解という段階は発音、語彙、会話、文法という 4 つを、具体的に設定しなければならない。

2 外中国語の 1 年間 30 あるいは 60 コマの短い授業では、文法よりも、発音の基礎（ピンインの読み書きができる）をしっかりと身につけさせることが重要ではないかと思われる。発音はすべての言語において伝達という重要な部分であり、発音が正しくなかったら、相手に伝わらないことが多々ある。何より、日本の漢字は中国の漢字と同じものが多いが、発音は全く異なる。しかし、学生は日本語の発音に影響され、中国語の発音を間違えて覚えることが多い。従って、2 外中国語の理解のプロセスで第一は中国語の発音基礎としたい。

その次は簡単な日常会話である。2 外中国語の学生のほとんどは中国語専門ではなく、興味があまりない学生が多い。そのような学生に興味を持たせるためには、文法よりも楽しい簡単な会話を中心にするのが望ましいだろう。もちろん、全く文法を教えないわけではなく、短い会話を教えながら、その中で文法を少しずつ教えていけばよい。したがって、理解させる段階の内容は発音が第一で、その次が楽しい簡単な会話を通しての、語彙と簡単な文法である。

3.3 内 在 化

第 2 言語習得の認知プロセスの核心は内在化であるが、2 外中国語教育で、どのように学生に中国語を内在化させるかは難しい。1 クラス 40 人前後のクラスにおいて、週 2 回の授業中で習ったことが内在化できるかどうかは、授業内容量と難易度によると考えられる。多すぎたり、難しすぎたら、理解する段階にさえも至らず、ましてや内在化させるなど論外であ

8. 2010 年郭春貴が行った調査では、80% 近い教員が授業の成果を感じることができないという結果であった。特に発音、文法はあまり出来なかった。「論日本大学公共汉语课的语音教学」(2010 年 8 月 20 日に第 10 回国際漢語教学討論会で発表した論文)

る。もちろん、指導方法にもよるが、たとえ優秀な学生にしても、内容が多すぎると、すべてを内在化するのは困難だと思われる。それ故、何を学生に内在化させたいか、教員はしっかり把握しなければならない。1年間の授業で第一に内在化させたいのは発音と言えよう。発音ができれば、自信が付き、学習の継続も期待できるのではないか。そのためにも、発音の指導方法をしっかり把握すべきだと考えられる。

3.4 統 合

最後のプロセスの統合は内在化したものを統合して応用する段階である。学生が習った中国語をどのように統合し、応用できるかは教育の成果の要と言えよう。

教学内容が適切ならば、発音中心で、簡単な会話と文法を1年間通して、少しずつ指導すれば、学生は内在化した後に、必ず、自信をもって、習った中国語を統合して、応用できると思われる。それはテストや聞き取り中心の試験などで、結果が出るだけではなく、2年生に上がった時に、単位取得の必要がなくても継続して履修することや留学することもこの結果と判断できる。

4. 新しい教学モデルの作成に当たって

2007年から、大学は全入の時代に入り、そのためもあり多くの大学で学生のレベルが低下してきている。「日本語さえできない学生に第2外国語を学ばせる必要はない」という声さえもあり、多くの大学で第2外国語は必修を外され、自由選択科目になった。あるいは週2回4単位の授業を週1回の2単位に変更する大学も増えている⁹。

このように厳しい現実直面して、いままでの翻訳中心、文法中心、重点なしの随意的な2外中国語教育の教育内容、方法のままでいい訳がなく、改革を急がねばならないと思われる。

新しいモデルを作る大前提として、教員の意識を高めることも欠かせない。教員は2外中国語教育の重要性と学生のレベルやニーズをしっかりと把握すべきだと思われる。

4.1 2外中国語教育の重要性について

果たして2外中国語は必要なのだろうか。今日のグローバル時代において、必要がないと言う人は多くはないだろう。「地球視野を持つ学生を育てる」、「国際理解力を育てる」などは多くの大学の教育理念として書かれており、2外中国語が必要であることはもう社会の共

9. 「朝日新聞」2008年5月26日

通認識になっているに違いない。

実際、第 2 外国語は、単に外国語を学ぶに留まらず、異文化理解という大切な教養教育でもある。また、新しい言語の学習を通して、学生の学習意欲を高め、新しい学習方法を身につけることも可能である。いままで学習してきた挫折した英語とは違う観点から、やり直せることもある。これこそがまさに大学教育に求められることなのではないか。新しい時代の大学教育は単なる専門学校ではない。今日の学生にとって、教養などの学習基礎力がなければ、専門の勉強も砂上の楼閣である。そうならないようにするためにも、中国語を含む第 2 外国語教育は教養の一環として、その重要性を再認識する必要があるのではないか。

4.2 学生のレベルとニーズ

全入の時代に入ってから、学生のレベルが低くなったことは認めざるを得ない。だからと言って、学生に責任を押し付けて、教えられないという考え方はどうだろうか。勉強する気があるかどうかは確かに学生の責任であるが、学習力が低い学生を受け入れるのは大学側であり、受け入れた以上は教育する責任があるだろう。一方的に学生が勉強が出来ないという考え方はもう時代に相応しくない。学生のレベルとニーズをしっかりと認識して、それに相応しい教育を行うことが大切ではないか。2 外中国語を含む外国語教育は学生のレベルとニーズに対応できる教育内容と教育方法を考えなおさなければならない時期に来ている。

5. 修大の新しい中国語教育のモデル

以上のことを念頭に置きながら、修大の新しい中国語教育のモデルの作成を試みた。モデルを作るためには、まず、教育の目的と目標をはっきりさせなければならない。

5.1 教育の目的について

4 に述べた 2 外の重要性と学生のレベルとニーズを考えて、修大の理念「地球視野を持つ学生を育つ」に基づいた中国語教育の目的は、「学生に中国語の学習を通して、中国語と中国文化、それから異文化に興味を持たせる、と同時に、学習能力とコミュニケーション能力を高めさせること」になる。

5.2 教育の目標について

以上の目的と現在の学生の状況を検討すると、一年間週 2 回の授業の教育目標は高すぎて、低すぎてもだめで、次のようなものが考えられる。

まず、中国語の発音の基礎（ピンインの聞き、読み、書き）をしっかりマスターする。そ

の次に400個の語彙、60個の簡単な会話、60個の簡単な文法ポイントを理解する¹⁰。

5.3 新しいモデルのねらい

2.3で述べたリレー形式の授業の問題点を分析し、同じテキストを使っても、2人の教員の特長を発揮できるように発音を徹底的に訓練するためには、一人が発音と会話、もう一人が文法と語彙を中心に教えるモデルが考えられる。したがって、新しい教学モデルは発音会話中心と文法語彙中心の2つのモデルが必要である¹¹。

5.3.1 発音会話中心のモデル

語学の学習に当たって、初級の段階は何と言っても発音が重要であることは言うまでもない。僅か1年間の学習であまりたくさん教えすぎるのは望ましくない。せめて、大切なもの、つまり発音を学生にマスターしてもらいたいというのが長年2外中国語教育に携わってきた筆者の考えである。発音さえできれば、学生は自信がつき、後々になっても自分で独学できる。また、日本人は漢字をたくさん知っているので、発音さえ覚えれば、すぐ多くの単語が読めるようになる。問題は発音ばかり教えると、教員も学生も退屈になりがちだということである。それ故、発音の訓練には工夫が必要である。それから会話を通しての発音訓練も考えられる。

発音と会話の訓練には、聞き取りが大変重要であることは言うまでもない。従って発音会話のモデルは主に3部分、つまり、発音と聞き取り、会話から構成される。

このモデルは最初の1ヶ月の発音段階のモデルと2ヶ月目以降のモデルを別々に考えなければならない。

5.3.1.1 1ヶ月目の発音段階のモデル

まず断っておきたいが、いかなる教学のモデルでも完璧なものはないので、ここで提案するモデルは、あくまでも参考である。

2外中国語は入門の授業と考えたほうがよく、最初の1ヶ月の指導がとても重要で、学生が興味を持てるかどうかはこの時期に決まると言われる。教員がきちんと教学の目的、目標、ねらいを念頭において、明るく学生に教えなければならないことは言うまでもない。新しいモデルは、発音会話と文法語彙に分けるが、最初の1ヶ月目は、文法語彙担当の教員も発音の授業をする。以下に1ヶ月目の発音段階のモデルを述べる。1ヶ月目は文法語彙の授業も共通である。

10. この400個の語彙は中国語教育学会が作った語彙アウトラインを参考し、考えたものであり、60個の会話と60個の文法ポイントはあくまでも長い年月の経験から考えたものである。

11. 修大は2010年にこの2つのモデルを実験的に行った。

1. 前置き (5分) : 興味が持てる社会問題, 中国関係の話をして, 雰囲気をはぐしてから, 本授業に入れば効果的である。

2. 簡単な挨拶用語 (5分) : 毎回 2 つぐらい「你好」「谢谢」「不客气」「再见」などを少し練習させる。2 回目以降は前回習ったものの復習もする。

3. 発音授業に入る (40分) : 2 人の授業は 1 人が指導して, もう一人が主に練習する。第 1 週は声調と軽声から, 単母音と複母音を教える。第 2 週は鼻母音, 第 3 週は子音, 子音と母音の組み合わせの練習, 第 4 週は変調とアル化, 数字と音節表を学習する。

4. 聞き取り (30分) : 聞き取りの訓練は, 最初にテキストを見ながら CD を聞かせる。次は教師の発音を聞かせる。その次は学生にテキストを見ないで聞き取らせる。そして, 最後に学生同士でお互いに問題を出しながら, 聞き取り練習をさせる。

5. 会話の復習 (5分) : 発音練習で疲れたら, 気分転換としても, もう一度, 会話の復習をさせる。今度は聞き取りの練習を兼ねて, テキストなしで, グループ練習, ペアの練習をさせる。

6. 楽しい時間 (5分) : 最後に学生との距離を近づけるため, 質問の時間を設ける。あまり硬く考えず, 「楽しい時間」と黒板に書いて, どんな質問でも認める。例えば, 今日習ったこと, 中国に対する疑問, 外国語の学習方法, 教師の外国語の学習経験など。

5.3.1.2 2ヶ月目からのモデル

発音の授業は一応 1 ヶ月 8 回とし, 2 ヶ月目以降は, 同一のテキストで, 授業を発音会話中心と文法語彙中心にはっきり分業する。

第一教学目標は発音を徹底的にマスターすることだが, 8 回の授業で発音を身につけることは不可能なため, 発音を定着させるために, 発音段階を終えても, 引き続きピンインの聞きとり, 読みという発音の訓練を行うことが肝心である。もちろん発音ばかり訓練すると, 授業が退屈になりやすいので, 興味を持たせるために日常会話も教えなければならない。つまり, 会話で習った会話文, 文法授業で習った文型の例文を使って, 徹底的に発音の訓練することが大切である。以下にそのモデルを提案する。

1. 前置き (10分) : 1 ヶ月目の前置きと同じだが, 2 ヶ月目からは, 毎回習った簡単な挨拶用語や会話文を使って学生に中国語で質問をする。例えば, “你叫什么名字?” “你是大学生吗?” “他是日本人吗?” など。毎月同じ問題形式で, 定着させると, 学生の会話力と聞き取りの力も高められる。

2. 復習 (5分) : ピンインをしっかりとマスターするために, 復習として, 前回習ったものを 3 問ほど漢字とピンインを書かせる聞き取りテストをする。テストをする前に, できれば, 1 回ぐらいテスト範囲の音読をさせる。

3. 会話の本文の訓練 (25分) : まず, 本文を解説してから, 徹底的に音読の訓練をする。

1回目はピンインを見ながら、教師が読み、学生があとについて読む。2回目は漢字を見ながら、少し早いスピードで読み、学生がついて読む。3、4回目は学生各自でピンインと漢字を見て読む練習をさせる。5回目は2グループに分けて会話の練習をする。6回目は隣の学生と会話の練習をする。最後にCDを聞きながら読む。

4. 単語と文法の例文の訓練 (25分)：文法授業で習った文をここで、しっかり音読する。ピンインと漢字の練習はもちろん、文の構造にも注意しながら、音読させる。1回目はピンインを見ながら、教師の後について読む。2回目は漢字を見ながら、教師の後について読む。3回目は自分で読む。その次に単語を入れ替えて読ませる。とにかくテキストの例文はよどみなく読めるようになるまで徹底的に音読させる。退屈にならないように、隣の学生と互いに読む。時には、何人かの上手な学生にリーダーとして読ませ、他の学生はあとについて読む。

5. 聞き取りの訓練 (20分)：練習が終わったら、毎回必ず聞き取りの訓練をする。その課で習った単語や会話文と例文の聞き取りをさせる。そしてテキストを見ないで、意味を日本語で言わせる。あるいは、ピンインを書かせる。まず教師が読み学生に聞きとりをさせる。その後、学生同士で互いに聞き取りの練習をさせる。

6. 楽しい時間 (5分)：1ヶ月目のモデルと同じである。

5.4.1 文法語彙中心のモデル (2ヶ月目から)

文法語彙中心の授業は徹底的に文法ポイントの説明と練習をして、音読や読みの練習は発音の先生に任せる。ねらいは学生に簡単な文法知識と文型を理解させることである。以下はそのモデルである。

1. 前置き (5分)：1ヶ月目のモデルと同じである。

2. 復習 (10分)：毎回前回習った文法ポイントを復習する。練習問題をチェックしたり、日本語を中国語に訳させたりする。

3. 新しい課の学習 (50分)：ウォーミングアップとして、1回会話の読みをしてから、各ポイントを簡潔に説明し、例文を学生に訳させる。それから、例文の単語を入れ替えて練習をさせる。時間の余裕があれば、学生に日本語の例文を作らせて、みんなで訳す練習をしてもいい。

4. 単語の練習 (10分)：いままでの教授法では単語の勉強はほとんど学生に任せ、学生が家で覚えることが主流で、授業中に単語を教えることはほとんどなかった。しかし、新しい時代の語学教育は、初級の段階では文法よりも多くの単語を覚えさせることが大切と言われ、単語の訓練も大切な一環として重視されるようになってきた¹²。そして学生に楽しく単

12. 投野由紀夫(編)1997「英語語彙習得論」河源社、望月正道・相澤一美・投野由紀夫 2003「英語語彙の指導マニュアル」大修館

語を覚えさせる指導法が要求されてきた。このモデルも単語の練習を授業に取り入れる。学生に各課で習った単語を覚えさせるために、教師はまず1つ1つ単語を音読練習させてから、5個ずつ隣同士でお互いに日本語を言って、中国語で答える練習をさせる。最後に教師から全員に問題を出して、みんなで答えるというような練習を提案する。カードを使って、印象づけるのもいい方法である。

5. まとめ (5分) :最後に学生が忘れないように、黒板かパワーポイントでその日に習った文法ポイントを簡単におさらいする。

6. 中国の社会文化の紹介 (5分) :学生に中国文化に興味を持たせるために、写真や絵を使って簡単な紹介する。映像を上映したり、歌を聞かせたりするなど、教師の工夫に任せる。

7. 楽しい時間 (5分間) :発音会話のモデルと同じである。

6. 結 び

2外中国語教育は総合的な科学であり、中国語の知識のほかに、日本語学、教育学、心理学、社会学、文化知識なども要求される。本論文はあくまでも2外中国語教育の発音会話を中心とする新しいモデルを提案するものである。教員がそれぞれ、自分の大学の学生のレベルとニーズに合わせて、調整するのが望ましい。但し、発音会話中心のモデルにしても、文法語彙中心のモデルにしても、教育の目的、目標を忘れてはいけない。そしてどちらの授業も学生に楽しく勉強させる工夫が不可欠である。そのためにも、教員は絶えず勉強と研究が要求され、教育に対する熱意と責任も問われる。中国語の「敬业与乐业」(職を尊敬する。職を楽しむ)という精神を見習って、よりよい2外中国語教育を実現したいものである。

参 考 资 料 :

1. 日本中国語学会編 2002 《日本の中国語教育——その現状と課題》東京好文出版社
2. 李泉編 2006 《対外漢語課程、大綱と教学模式研究》商務印書館
3. 国家漢語國際推廣領導小組辦公室 2009 《國際漢語教師標準》外語教學與研究出版社
4. 山口雪江 2004 「東京都内100大学における中国語教育カリキュラムの現状について」『華蓉論叢』第3号
5. 輿水優 2005 『中国語の教え方・学び方』日本大学文理学部叢書
6. 木野茂 2005 『大学授業改善の手引き』ナカニシヤ出版
7. 杉江修治等 2004 『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部
8. Gass, S. 2003 “Input and interaction” 『The handbook of second language acquisition』(pp.224-255) C. J. Doughty & M. Long (Eds.) Oxford, UK: Blackwell

Summary

一周两节的二外汉语课的教学模式探讨

——以广岛修道大学汉语课为例——

郭 春贵・郭 久美子

日本大学一般都得选修两种外语，大多数都是以英语为第一外语，以德语、法语、汉语等外语中的一种为第二外语。本文主要研究这种第二外语的汉语课(本文简称为“二外汉语课”)的问题。并结合广岛修道大学的教学经验，探讨这种课程的有效教学模式。

日本大学一周两节的二外汉语课因各大学的情况而异，主要有以下四种类型。(1)各自为政类型。两节课由两位教师各自负责，互不联系。优点是自由，缺点是随意。(2)半分工半自由类型。两节课的内容分工，但教材不统一。好处是不用联系，缺点依然是各自为政。(3)一位教师全权负责类型。好处是教材统一，不用联系，教学有一贯性。缺点是如果自觉性低的教师则容易流于自由主义。(4)两人接力类型。两节课由两位教师接力上课，每次课都教语法语音会话等。好处是教材统一，上课内容多。缺点是教学无重点。

广岛修道大学1994年以前采取的是各自为政的自由类型。1995年至1998年为一周一节课，分两年上。1999年至2009年为两人接力类型。笔者总结两人接力类型有以下三个问题：1. 教学重复过多，进度缓慢。2. 中日两位教师的不平衡。接力类型课的两任教师，最好是一位负责讲解的日本教师，一位负责操练的中国教师。遗憾的是日本大学的教师条件都无法达到这个要求。3. 教学无重点。由于两位教师都教语法、语音、会话、文化等，造成教学无重点。

为了更好地提高二外汉语课的质量，我们必须改善二外汉语课的模式。这方面本文觉得可以借鉴 Gass 的第2语言习得认知的四个过程：输入、理解、内在化、统合，来安排课程目标与制定模式。目标应该置于1年课程内可能达到的“掌握好语音基础，引起学生的学习兴趣”。模式应为“教材统一的语音会话与语法词汇两种模式”。

前一个月的发音阶段，语音模式与语法模式基本上共同上语音课。两节课虽采用接力式，但基本上还是一节讲解，一节操练的模式。语音阶段过后，就开始分工。使用同样教材，一节专讲语法词汇，一节专操练语音与会话。同样一门课，同一教材，两节课的模式不一，互补互长。学生了解教师的分工，学习心理能有所准备，而且学习内容由于多练多讲，能得以巩固。特别是基础课最重要的语音，能有重点地训练。学生发音基础好，学习兴趣与信心都能提高。

不管是语音会话模式，还是语法词汇模式，在90分钟课里，都得根据学生的要求，学习能力灵活安排学习内容模式。比如开始上课时的开场白，然后练习朗读，讲解语法点或练习会话，练习听写等等，尽量根据学生的水平增减内容，尽量寓教于教，让学生能在轻松的环境下愉快地学习。